

## 梅雨とアジアモンスーン

梅雨はじこからお天気推理

サーフィンで有名なハワイの高波は赤道を越えて南極海から押し寄せる。南緯四〇度付近にある「吼える暴風圏」で激浪が渦巻き、冬の季節の南半球で作られた大きな波浪がうねりとなって赤道を越えて、七千キロの旅の果て次々と高波となってハワイの海岸に押し寄せてくるのである。南米ペルー沖から中部太平洋の海面温度が異常に高くなるエルニーニョ現象が地球をめぐる大気の流れを変え、海と大気が影響を及ぼして世界各地で異常気象をもたらしている。海に国境はなく大気も国境はない。中国大陸から黄砂や大気汚染物質が海を越えて日本に飛んでくるのも日常茶飯事となっている。

梅雨も地球をめぐる大気の流れとユーラシア大陸と太平洋、インド洋が演じる東アジアの雨季である。爽やかな初夏と熱帯なみの真夏を分ける梅雨は、風と雨が主役の大規模な循環システムであるアジアモンスーンの一部である。

赤道上空約三万六千キロの「ひまわり衛星」から地球を眺めると、バレーボール大の青い地球が漆黒の宇宙を背景に浮かび上がり、両極のホワイトキャップとの間に青い大洋が広がり、その東の端には日付変更線の向こうに

ハワイ諸島が点在し、西はチベット高原の南縁を白い峰々を抱くヒマラヤ山脈が弓状に横たわっているのが見える。その南東のインドシナ半島から日本列島の上を通り千島列島の南に伸びる、延々数千キロにもおよぶ白い帯が、広大な太平洋の北西部を縁どるように白く輝いて見える。梅雨前線帯の雲の帯である。中国ではメイユと呼ばれ朝鮮半島ではチャンマとよばれている梅雨は、最も早い南西諸島における五月中旬から次第に北上して、西日本では六月上旬の入りとなり、北上する前線が途中でジャンプして消えてしまうので北海道には梅雨がない。

梅雨のメカニズムはこうである。夏の北半球が暖められ、冬半球から南東の風が赤道を超えて吹き込み、インド洋やベンガル湾から湿った気流が北上とともにアジアモンスーンがユーラシア大陸に吹き込む。聳えたヒマラヤ山脈と高度4-5千メートルに及ぶ日本の数倍の面積をもつチベット高原が、天に突き出して暖められやすく巨大なヒーターとなって、モンスーンを吸引する巨大ポンプの役割となる。吸い込まれた大量の湿った空気が豪雨をもたらし、同時に、吸い込まれたモンスーンが地球の回転の力で南西に曲げられインドシナ半島から日本に向かうモンスーンの流れがつくられ、日本の梅雨前線に繋がるのである。天気図をみると夏の太平洋高気圧と北の冷涼なオホーツク気団の間が梅雨前線が停滞し、

前線の上空にはヒマラヤ山脈の北側をまわるジェット気流が流れている。別のジェット気流は巨大ポンプのチベット高原の北側大きく蛇行を強いられ、その結果としてオホーツク海付近では流れ分離したブロッキング高気圧という長寿命で停滞性の上空の高気圧ができ、ガツプリ四つに組んで動かなくなる。

冷たいオホーツク海高気圧が長く停滞して、冷風扇の役割を果たして、北東の冷たい風「やませ」を日本列島の東日本、北日本に吹きつけ、北側のオホーツク海高気圧が強くて前線が南下すれば「梅雨寒」、北海道では「リラ冷え」となり、本州の中部山岳より東でシトシト型の雨をもたらす。対照的に西日本では太平洋高気圧からの送風ポンプで、「湿舌」と呼ばれている熱帯並みに湿った南西流の流れ込で「ザーザー」型の豪雨となる。空梅雨ともなれば「列島水不足」となり、集中豪雨ともなれば二十年前の誌七月二三日夜の長崎豪雨のように一時間雨量一八七ミリで大被害となるように、梅雨は恵みの雨と豪雨との両刃の剣である。

このようにインド洋やベンガル湾とユーラシア大陸のモンスーン関係に太平洋とオホーツク海の盛夏と冷涼のコントラストに上空のジェット気流が役者となって、ヒマラヤとチベットが演出して梅雨が起きているが、日本の梅雨入りの時期は、インドモンスーンの開始と密接に関係しており、モンスーンの入りで終わるチョモランマ登山のタイミング好

機にも繋がっている。登頂の成否は、冬のジェット気流がヒマラヤからはるか北上する4月末から、モンスーンがベンガル湾からネパールに到達する5月末までがブレモンスーンと呼ばれる僅かな期間で好機が恵まれるかどうかとなる。

筆者の友人等のパーティーが昨年の五月、チョモランマの北東稜から頂上に挑んだ。高度五千呎のベースキャンプに一ヶ月間、日本の数値予報の予想資料、衛星資料を自前で解析してインマルサット衛星経由の衛星電話で日々の気象コメントを日本から送り続けた。稜線付近のジェット気流が北上して風が弱まった時期で、周期的に通る気圧の谷を避けて「一時的な好天が二、三日続くかどうか予報をもらえないと成功しない」という厳しい条件が求められていた。

モンスーンの雲と雨域の北上の動きと下層の湿りの分布を衛星写真を見ながら、気圧の谷の通過を見極め、ゴーサインを出した後はハラハラのしどろみであった。ついに好機到来で五月一七日、二四日の二度の登頂成功となったが、登頂直後に猛吹雪で前進キャンプに逃げ込んだと情報が、八千呎のキャンプから日本の携帯電話にかかってくる。便利過ぎる世の中となってしまった。

もしヒマラヤ効果を本気で「ヒマラヤチベットを削ってしまったら」と、シミュレーションした人がいたが、結果は梅雨がなくなり、

緑豊かな日本は年間雨量で約一八〇〇<sup>ミ</sup>の雨が激減した。数百万前に始まり現在にも続いているヒマラヤ造山運動という悠久な時間と太平洋・インド洋とユーラシア大陸そして地球をめぐるジェット気流など、国境なき流れの中で生まれたのが梅雨なのである。もし削れば梅雨が消え、同時にヒマラヤ登山の楽しみもなくなり寂しいこととなる。

(二〇〇四年六月)